

ゲタに履き替えたナオちゃん

『千里山って文化都市?』

二十七回生 萩原 直大

長靴ばかりはき、周りから「長靴小僧」の名前をもらったナオちゃんも、幼稚園に入ると、長靴がゲタに変わりました。成長期だからズック靴では直ぐに履けなくなりますが、その点、長靴は少々ダブダブでもかまいません。それだけ長持ちすると節約家のお母さんが考えたのでしょうか?

そう言えば、ゲタも鼻緒はよく切れましたが、直すのは簡単。歯もよくちびりましたが、確かゲタの歯は、ゲタ本体の臍(ホゾ溝)に差し込む構造で、歩いて歯が減ると、別の新しい歯と取り換え、またずつと履けるのです。今は男性も女性もほとんどゲタを履きませんが、構造は本体も歯も一体の木から

一切手を使わずに神業みたい。ナオちゃんは、幼稚園や小学校からの帰り、いつまでもいつまでも見とれていたのです。

でもゲタの歯を直してくれるのはこのおじさんではありません。

「直し」 「ナオシ」と時折、路を歩いているおじさんがいました。傘、ヤカン、ナベ、窯・・・なんでも直してくれるのです。

そうそう煙突掃除のおじさんもいました。肩にグルグル輪になった竹の掃除器具を担いで。この輪の先がブラシになっていて、焚口から突っ込み、煙突内側を先までブラシでこすり、煙突内側についた煤を払い落すのです。

別途、下の噴水から少し西に行ったところにお風呂屋さんがありました。中川さんの本屋さんの向かい側でした。

ナオちゃんの家は元々あったのか、それとも後で付け足したのかお風呂はありましたが、五右衛門風



バケツを持って幼稚園
左手に竹の蛇、右は林裕三
ちゃん ナオちゃんはゲタ

造られていると思いますから、歯がちびればそのまま使い捨てになります。昔のものは究極のリサイクルでしょうか。そう言えば、駅と線路の下をくぐる地下道との間で仕事をされていた靴屋さんでも、よく靴底をそっくり取り換えたり、踵部分でちびつた分を張り付けて修理していたのを覚えています。

あの少し足の悪かった靴屋さんのおじさんとナオちゃんは、すっかりお友達になったのです。

口に数本の釘を放り込み、今度は金槌とキスをすると、なんと釘は金槌の打ち込み面に立っているのです。そのまま靴底に打込めます。

呂といい、鉄窯でした。

だからお風呂に最初に入った人が、木の底蓋を沈め、鉄窯の底の突起にこの底蓋を引っ掛けるのです。でないと浮いてきちゃうので。

この底蓋が無ければ、底はとても熱く、お風呂に入れません。体の小さなナオちゃんにはこの底蓋を沈めるのは至難の業でした。

お風呂を沸かすのは、外の小屋でした。最初の内は薪炊きで、その内に石炭焚きになりましたが、小学校2〜3年生ともなると、新聞紙―細い薪―太い薪―石炭と順に火力の強いものにしていく術を覚え、ナオちゃんの仕事になりました。

小屋といっても雨を防いでいるだけの掘っ立て小屋。冬なんて寒いこと寒いこと。

恐らく今の子は、火を起こすなんて出来ないでしょう。ノコギリ、ナイフ、金槌も使えないでしょうね。幸せなことなのか、その逆か?

だから当時の千里山の風呂がある家は必ず煙突が

あります。絶えず、掃除をしないと煙が抜けません。そうなるとう火が消えてしまったり、家の中に煙が入ってきます。

そうそうゲタの話でした。そういえば幼稚園の時、こんなことがありました。

下の噴水から公民館の方に向けて、1つ上の西脇さんのマーちゃんと一緒に、帰っていた時のことです。小池さん（今も残る大きな石垣の家）や小塩さんの辺りに住むマーちゃんと同じ年のケンカ大将からケンカを売られたのです。その理由は忘れませんでした。その子の名前も。

相手は1人、こちらは2人とは言え、あの辺で名の売れた喧嘩大将。2人は必死で逃げました。でも相手の方が足も速く、あっという間に追いついてしまいました。

絶体絶命のピンチです。その時、ナオちゃんはとっさにゲタを脱ぎ、それをその子の顔に向けて振り

降ろしました。それが見事に命中。彼は突然、泣き出したのです。「勝負あった！」です。当時の喧嘩は、一方が泣いたら終わり。

またまた話はそれますが、去年の秋、74歳になったナオちゃん、久々に千里山を尋ねました。そして先のお古戦場を訪れました。

公民館と下の噴水のちょうど真ん中あたり。先の小池さんの向かいに家があり、そのガレージに『小塩』さんの字が書かれていました。珍しい名前だけにきつと当時の遺族の方が引き継いでお暮しなのだろうと思いました。

いずれにせよゲタ様々です。

でもゲタにからむ恥ずかしい話もあります。

ナオちゃんは小学校1年生の時、物凄く字が下手だったそうです。小学校に上がるまでは、字は元より、数字だって読めませんでした。そもそも2歳の時に終戦です。絵本なんてあるわけがなく、字に触

れることもありませんでした。

数字で読めるのは『3』と『6』だけ。時計のその数字が読めないと生きていけなかったのです。

『3時』のおやつつ時間に家に居ない子は、おやつは抜きになります。『6時』はきつと、夕飯とラジオ番組の影響だと思えます。

ラジオ番組は何だったのでしょうか。『おらー三太だ』『鐘の鳴る丘』『二十の扉』『私は誰でしょう』『向こう三軒両隣り』『とんち教室』？それらは、もう少し遅い時間だったような気もしますが。長崎ばってん、石黒敬七・・・覚えている限りを並べてみました。

でもよく停電したものです。断水もありました。そもそも千里山って大学前の三島さんのお宅の傍にポンプ場がありました。あそこからお稲荷さんのある山までポンプ圧送してたのですよね。

後は高低差を利用しての自然流下だとしても、停電になると、ポンプ圧送ができません。つまり断水

になります。断水が数日続くと、下の噴水に消防のポンプ車が来て、バケツ等を持参し、水を貰いに行きました。小さなナオちゃんがどれほど有効だったかは???

また脱線しました。ナオちゃんの字があまりにも下手くそだったことから、小学校2年生の時に、お習字を習いに行かされました。（昭和26年）

毎週、土曜日の午後、公民館の2階です。当時の公民館の2階は、ゴザで、下で履いてきたものを脱ぎ、上に上がります。

だからもつと以前、ここでお母さんたちがモンペ姿でダンスを習っていたころも、裸足か足袋だったのでしょうか。

お習字ですから、当然、ゴザに正座し、長机の上に、先生に書いて頂いた見本を左に置き、右に硯、その真ん中に新聞紙を置き、そこで何回も練習します。最後に半紙に清書し、先生に見てもらいます。先生は朱色の墨で直して下さり、注意を受けます。

その習字もいつもゲタを履いていきました。いつもは裸足ですが、さすがに冬は足袋です。ところがこの足袋、普段、ゲタで遊びまわっていますから、底が穴だらけ。その穴をお母さんが継接（つぎは）ぎしてくれているのですが、継接ぎの上に継接ぎで、元の生地は残っていないぐらい凄まじいものでした。正座してしますので、後ろの人にはナオちゃんの足袋の底は丸見え。それが恥ずかしいのです。案外、見栄っ張りだったのでしようか。仕方がなく、お習字の時間だけ、足袋を脱いでいました。

ナオちゃんには3人のお姉ちゃんがいきましたが、一番下のお姉ちゃん（千二小 24回生・和子）が「アンタどないしたん。足袋は？寒いでしょう」と聞くのです。デリカシーに欠ける姉。

さてその公民館の2階も、1年後くらいから、平日の夕方、ソロバン教室が始まりました。「ゴワサンで願いましてワ〜1円なり、5円なり〜」と外まで聞こえてきたものです。

でした。でもこのお陰でナオちゃん、新聞の見出しぐらには読むようになりました。李承晩ラインでよく日本漁船が拿捕されたり、北緯38度線でマッカーサ將軍率いる国連軍が、膠着状態になったりと。さらには、ベトナムの独立戦争で、北緯17度線近くのディエンベンフーというところで、フランス軍が大敗したことなどを覚えていきます。



さらにゲタが有利だったのは、紙芝居を見る時。下の噴水にやってきた紙芝居。商店街の子はおやつに5円ほど貰って、この紙芝居屋さんが売る水あめを買います。ナオちゃんはお金を持っていませんから、当然、ただ見です。紙芝居のおじさんの鋭い一言。「ただ見は後ろ」と。だからいつも一番後ろから見ること。その時、靴よりゲタの方が少し背が高くなり、前に陣取るお兄ちゃんたちの頭の隙間からのぞき見るからです。

当時の紙芝居は、『黄金バット』や山川惣治の『少年王者』。アメンホテップ、カバ男、豹ババー、ウーラー。確か「おもしろブック」にも連載されていたように思います。でもうろ覚えです。

ナオちゃんが小学校2年生（S・26年）の時に始まった産経新聞連載の『少年ケニア』も、山川惣治です。こちらはよく覚えていきます。朝起きると真っ先に、少年ケニアを見？ 読み？（絵と物語が同じくらいのスペース

その後ナオちゃんのゲタ通学は続き、高校・大学でも時折、ゲタ。もちろん、通学時間帯は通勤時間帯でもあり、電車はそれなりに混んでいます。

ゲタは双方、危険ですから避けていました。夏休みのクラブ活動の練習で学校へ行くときなどは、ナオちゃんが高校生になった頃（昭和34年〜37年）は、経済的理由というよりは、バンカラぶるものが、一部の男子生徒の間ではある意味、オシャレ？だったのです。旧制高校生がマントに朴齒（ほうば）のゲタで闊歩していたのと同じ心境でしょう。お姉ちゃんばかしの間で育ったナオちゃんには、バンカラなんて気はこれっぽっちもなかったのですが、しかしこのナオちゃんのゲタ生活から、千里山や吹田市って一見、文化都市、美しい街並みなんて言われていますが、なんのなんの。

ナオちゃんがゲタを愛したということは、その頃未だ千里山はアスファルト舗装がされていなかったということなのです。

東京オリンピックピックの頃ですら未だです。恐らく、千里山の道路が隅々までアスファルト舗装がされたのは万博の直前では？

さらにナオちゃんも昭和47年に結婚し、51年に2人目の子(女)ができました。ナオちゃんの両親は平成6年まで千里山に住んでいましたから、お盆・お正月は必ず奥さんと子供3人を引き連れ帰省していました。その娘が大きくなって曰く

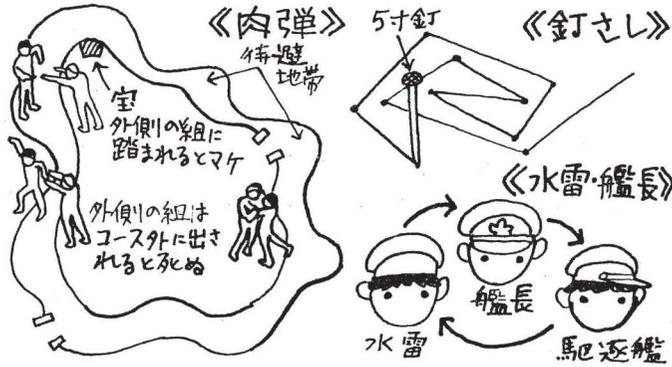
「千里山の家のトイレは落ちるんじゃないかと怖かった」と。昭和55年くらいまで水洗ではなく、ポットン便所だったということです。ナオちゃんの曖昧な記憶ですが、牛の曳く肥車での汲み取り方式はオリンピック前後まで続いた?と思います。

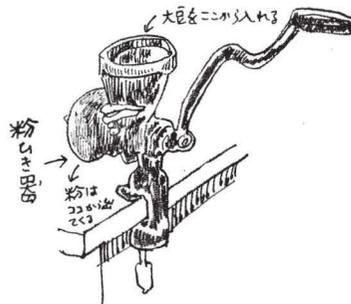
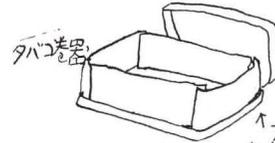
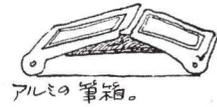
その後はバキューム車です。千里山って本当に文化都市だったの? とてもそうは思えないけど。

でも、道路がアスファルト舗装されていなかったことは、ある意味とても幸せなことでした。遊び場

がなく、また遊び道具すらない時代、道路は子ども達にとつて最高、最適な遊び場でした。その地面が舗装されていたのでは、宝踏み、Sケン、石ケリ、カンケリ、竹馬、缶馬、縄跳び、一段、鬼ごっこからの派生遊び、探偵ごっこ、戦争ごっこ(駆逐艦、潜水艦、戦艦の3すくみ遊び)は時に取っ組み合いになるので、擦り傷が絶えません。特に釘刺し遊びに至っては、アスファルトでは釘が刺さりません。宝踏みだって、線を引くのに蠟石で書かねばならず、あとで消すのにも大変です。その点、地面に棒で書いたのなら簡単。

文章力で勝負できないナオちゃんは、上手い具合に虎の巻を探してきました。そこには昔の遊びや自分たちで作った遊び道具のイラストがいっぱい。さらに懐かしいはやし言葉・ざれ言葉や面白い資料もいろいろと掲載されていました。それらを次頁以降に掲載しますので、是非、昔を懐かしんで下さい。





はやし言葉、ざれ言葉

ケッコウ毛だらけ 猫灰だらけ
おまえのおケツはクソだらけ

ミッチャん みちみちウンコたれて
紙がないから 手でふいて
もったいないから なめちゃった

バカ カバ チンドン屋
おまえのカアチャン デベソ

おみやげ三つつ タコ三つつ
とうさん かあさん やっとくれ

アタリキ シヤリキ ケツの穴 ブリキ

デブ デブ 百貫デブ

鶏卵1個の値段と1所帯当り1年間の購入数量

年代	1個の値段	購入数量
昭和21年	6.36円	5個
“ 22年	12.34円	46個
“ 23年	18.51円	87個
“ 24年	18.75円	131個
“ 25年	60円	217個
“ 26年	46円	252個
“ 27年	91円	312個
“ 28年	18円	327個
“ 29年	92円	407個
“ 30年	18円	448個

今は幾らするか知ってますか？(男性への質問)

一人、一日、一個食べるでしょうか？

一所帯の人数も極端に少ないですね。当時は6〜8人ぐらいだったでしょうか。